

男女共同参画センター(アイレック)は「女性も男性も性別にかかわらず個人として尊重され、平等にいきいき暮らせるまち」をめざして開設されました。これを記念して開催するアイレックまつりは、公募で集まった市民(実行委員会)が主催し、企画・準備・当日の運営も市民が行う、アイレックならではの「市民参画」による手作りのイベントです。

講演

夢見る条件をつくる

〈貧困・格差・無縁社会を考える〉
講師 湯浅 誠さん(反貧困ネットワーク事務局長)



湯浅 誠さん

あなたはこの時代に何を夢見ますか。

男女とも15〜24歳の若者の非正規比率およそ5割、30代前半男性の未婚率およそ5割。夢を見る権利は誰にでもあるはずなのに、夢を見ることが出来ない。今の日本がその条件を作っていないから…。

推計では、今からおおよそ40年後の2050年に、高齢者1人を生産年齢人口1人で支えなければならぬ。現在は3人にひとりの割合で支えています。このままでは、年金、税金、医療は、間違いなく今よりも負担が増す方向で進んでいく。ではどうすればよいのでしょうか？非正規雇用の若者、出産を機に仕事の継続を断念し、家事・育

児に追われる女性、仕事のないホームレス、障害を持った人などが、社会参加でき、働くことができれば支える人が増える、と湯浅さんは語ります。

高度経済成長期の頃から、男性は家族の分まで払う高い給料の代わりに、会社に尽くし働くという体系が出来あがりました。

現在、こうした雇用体系は崩れ、自分を守ってくれるはずの傘は年々小さくなり、はみ出た人たちが切り捨てられ、不安定雇用者や貧困世帯の増加が指摘されています。

10働けなくてもいい、3働けことが出来れば。仕事の効率的にはマイナス、しかし、その人が元気に「働いている」ことによる周りへの影響は決してマイナスではない。その数値化されない部分を見逃してしまい、日本は大きな損失を生みだしているのです。自殺者は、13年連続年間3万人、合計40万人にもなります。これは2.7兆円の損失だとか。福祉を利用し一人ひとりの力が発揮できる場を作ることが、長い

目で見れば日本の大きなプラスなのです。

家族の話を織り交ぜながら、淡々と語る言葉の端々にユーモアがあふれ、時間はあっという間に過ぎました。50年後は、何歳になっているでしょうか。夢見る条件が、そろっているとい

(平川)

講演

うそもホントも混ざる

「食の情報」を見極める

講師 高橋 久仁子さん
(群馬大学教育学部教授)

健康に関連する食の情報がマスメディアや、産業界から大量に提供されています。食事や「健康食品」などに関するテレビ番組をはじめ、健康不安を扇動する本等も数多く出版されていますが、ウソもホントも入り混

じるこの種の情報は少なからぬ人々の食生活に影響を与え、時に食生活を混乱させます。食べ物や栄養が、健康や病気へ与える影響を過大に信じたり、評価することを「フードファディズム」といいます。身体への好影響や悪影響をことさらに言い立てる論です。食生活と健康が密接に関わることは事実です

「それ」さえ食べれば健康が確約される食品はありません。ないにもかかわらずあるのかのように期待させるのがフードファディズムです。痩せる効果を期待して納豆やバナナが売り切れた現象が典型的な例です。食品に要求される安全性とは、摂食時に病原(微)生物によって汚染されていないこと、そして、常識的な摂取量・摂取方法で有害作用を発現させる有害物質が含まれていないことです。

宣伝広告にも注意が必要です。ある製品に「お肌プルプル」としか書いてないのに「お肌がプルプルになる」と読んでいませんか。それは行間を読まされてしまっているのです。宣伝文言の行間を読んではいけません。読むべきは栄養表示です。ラクして健康を得たい心理につけ込むビジネスは巧妙さを増しています。「健康食品」で健康は買えないどころか、場合によっては「健康」を買いこむこともあります。情報に惑わされず、健康の維持・増進の三要素は「栄養・運動・休養」であることを、念頭においておくことが必要です。

女性も男性も自分が何をどう食べるか「食生活運営能力」を身につけ、食情報のカラクリを見破る目を養うことの大切さを痛感しました。(下神)